

共産主義と観光学

近代観光の起源は、19世紀のトマス・クックによるツアーを起源とし、労働者に適切な休暇を与え、それによって生産性の向上を目指したという意味で、極めて資本主義的な特質を有していた。20世紀に入り、各地で共産主義・社会主義国家が成立すると、各国の政府は労働者の健康に関して十分な配慮を示す必要上、保養所が多く作られるとともに、十分な休暇を取るよう政策的な配慮がなされた。

近代の労働問題を考える上で、各国の共産党が労働者の処遇上、「観光」をどのように捉えていたのかは明らかにするべき論点であったが、日本においてはこれまでのところ十分に顧みられた形跡がない。

また、現在では、旧東欧圏をはじめとして、共産主義国家であったことをノスタルジーとして楽しむ形態の観光も流行しているし、スイスなどは冷戦時代の核シェルターを観光資源として活用している。さらには、「鉄のカーテン」の時代であっても、様々な情報は観光というメディアを通じて流通し、共産主義国家の崩壊をもたらすことに寄与している。

このように考えると、20世紀最大の思索の対象であった共産主義に関して、観光学の観点からこれまで考察をしてこなかったことのほうが不思議ですらある。

上記の学問上の要請に答えるため、観光学研究部会では、その名もストレートに「共産主義と観光学」と題した企画セッションを提案したい。

招待講演者として、日本はもちろんのこと各国の共産党及び共産主義者をアートの文脈で解釈し続けてきた丹羽良徳画伯をお招きし、現代における Kommunismus を観光的な誘引力という観点から考察していただく。

さらに、観光学研究部会からは、部会長の井出明が現代の観光シーンで Kommunismus の歴史がどのように使われているのかを分析するとともに、新会員の中俣保志が“地域”をキーワードとして丹羽作品への接近を試みる。議論の最終段階では、マルクス経済学を専門的に研究してきた八木が俯瞰的な視野から全体を総括するコメントを述べる。